



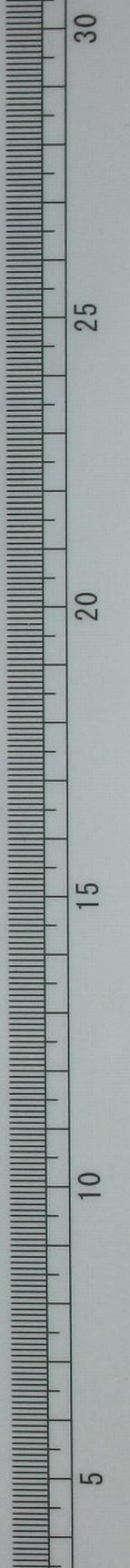
朝夷巡嶋記

第六編

二



413  
939  
N27



門 4 13  
頁 939  
卷 13

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之二

東都

曲亭主人編輯

法蓮の粉餅配

陰徳の倒應報

後輯第五十一

再題越中國婦員郡岩神の郷よりける船向判五が宿所の朝夷三郎義秀が  
 異ふ義邦并平亦の往方と索求ると加賀の小松の山よりあつたてふもよるは七二二  
 別とてしる二とせの事なり来るまを今茲をな陸奥の戦のりこの地小傳を義秀が  
 今彼処ふあり義邦夫婦を拯ひ出して経任を討捕する軍の勝負云々と風聞  
 大なる事とされはるその彼人義を結びたる友達の為本意を遂る大將副將と相伴  
 れて直不謙倉へ奉るとの近日は音信なき事とあるのうらやま亦虚譚の  
 るはあつたてふ事なりかちあつたのであると云はる家の内の人みよる日くは噂をききあつた子歳と

月 日 年 編 集

歴までも憑りし甲斐ぞる苦樂哀懼聚散離合常る現夢の世の夢と  
 覺ぬ迷ひを果しける時建仁三年六月七日判五宿所志ま  
 佛夏ありあつて郷小菩提所る地藏尊寺へ奉りて出りまふも還りて三宿亦宿  
 在る後廣光妻淺良井と根々並平奴婢の火焼水汲り配の餅搗音間斷  
 る上を下と渡取の女も堪らぬ夏の日消し立升る甕の湯氣は玉の汗かくそ  
 ぐは臺所他も傍よのちと配に出せとまゝ盡ぬ敷くむとまゝ餅も暑れ日  
 影も片より未の刻過けり結外稻向判五八年尚る旅客の寢果るを  
 伴う菅笠引提の表つ頻り小波音の音は電門より覗てまゝ餅搗  
 終るま土旺前とくこのけの暑熱も一は堪らぬまゝと勞声を淺良井  
 とやく笑ひけり母屋の簾戸をのぞく推ひた出迎へて今還りせぬ宿  
 疾くと喘ぎて判五の言は推禁め否うら捨て措多渠當も隙たるは寺へ遠れ  
 路中ものぬを少く日蔭のまはる今朝の雨やく塵埃も立せ風さあまらる汗  
 と流きよる家小入るわらるる及立の稀るればとせと假寐の還  
 留客るを先まゝ使はすの外仕事とせし許りあつてのを淺良井のむ  
 勿体るれと宣ふる廣光が長病著瘳りて稍旅ちもみる洪恩よりのを況  
 稚兒小三と孫のま子の子とて慈育の庇を骨を折り身を粉小推くも憂  
 とはせぬと物数るぬ女子の甲斐さよろづよひつるさ鈍まとのとせぬは海邊  
 侍るかとの涙さう判五も共まゝと臉を汗み紛らして掻拭ひて後方を  
 見るの孫の如く子のとてのれむつれぬと後と更向暇多るけり小三との何  
 如くも田鶴木も悲しむと問れて淺良井さればと小三二三阿父が鄰村まて所  
 要のりねくもくとも俱り又如くさる今の程添乳をされて福室中のよ

月 二 二 編 下 一  
 一三

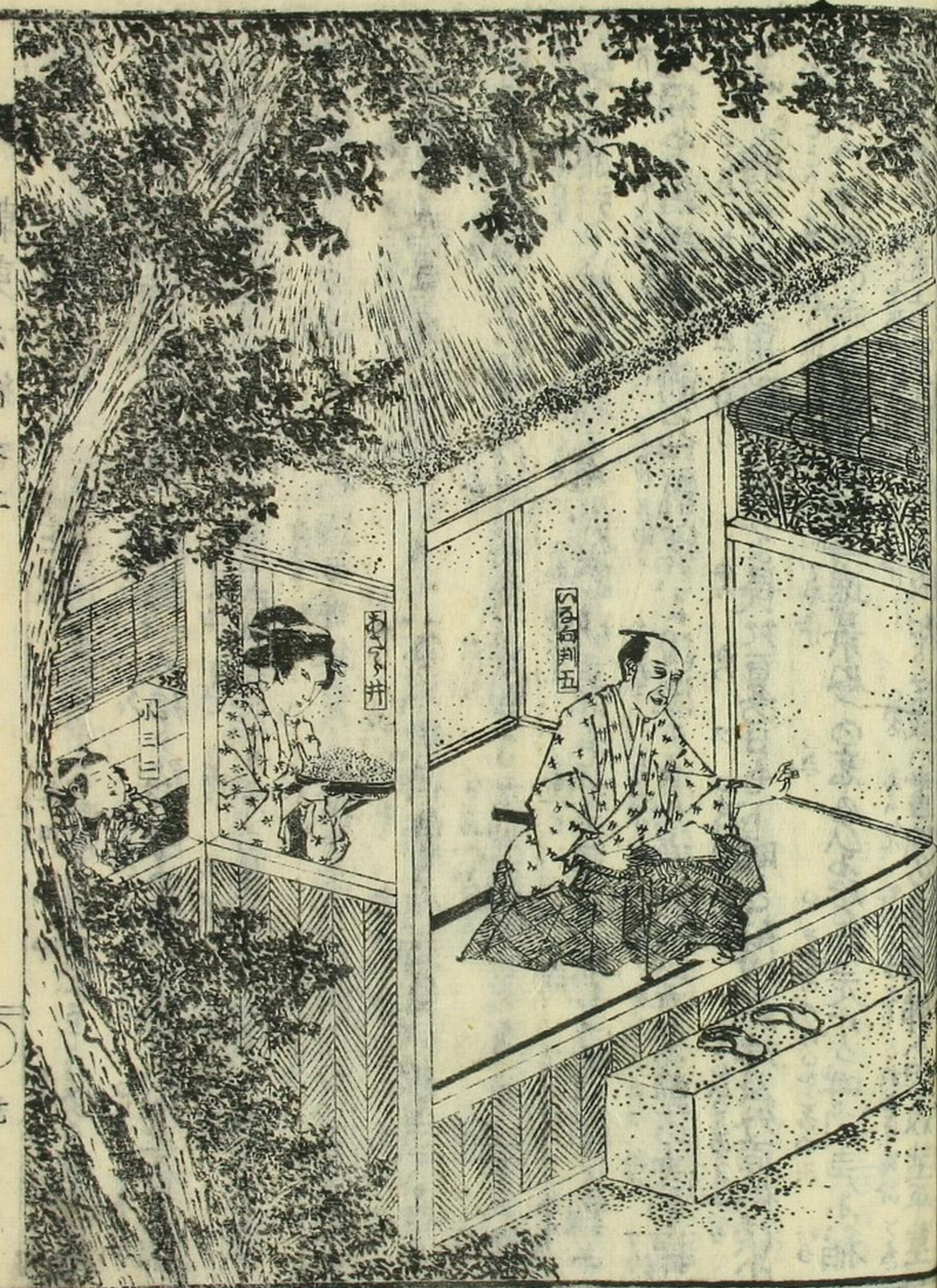
判五の領なくして熟睡してをるその一なるもの多りせば乳母ホの衣の綻ひら縫ふ  
 暇にまゝうへへ一三の亦何ホの故の鄰村へもたつらんと再び問はざれば戸榎殿の  
 家隸達の村巡りよりよとてわくけの翌の程より由來の風聞あり茲とて正  
 一の沙汰なるを鄰村まで赴て問定ぬんとて出ぬる小三二が跡追ひ共侶おとそ  
 携へるものを曳く披きくぬれぬひの程も亦くもわぬ程かとと報れば判五の  
 頭を傾け戸榎殿の御内人の未ませるとの風聞ありとも今出来秋の比より  
 ぬをその村巡りの為にあつて朝夷殿の陸奥ゆくまゝに功名云云とのふが実  
 事であらぬ吾侪の嫌あることさへも官府にあらぬやとそれらのしを示さるふ  
 ち使をそのぬれぬれは外より外より合はるるもさ去歲の秋三飯一  
 別者の往方をまゝなる奥のくそを起行のそのち信も覚えたりしこの春信夫の郎  
 堂なる馬艱標吉郎嗣忠とこの和郎を別者の使お立て三飯一も恙なく主役  
 環會より元晴大人の実義親切管轄のゆゑに巨細の事も朝夷殿の

事そのその比まのきつりるにさうち歎たる友鶴がとひつけと流ちかこさまも益  
 るに諍言の信夫の没落別者の厄難覚え比いといふう幼劣のそと春信夫の  
 長雨に氣色はたえさりの禍還て福とあり此度の勝軍を身おのる五農ものと秋  
 一にまじらう切て弥生の比まのこの風声の響を悔しにさるるんやこのひた歎息の  
 けるぬれ思ひを浅良井が浅く汲ぬ憾のさく理りりともひひの慰難て共信よ  
 歎息の外さるけりこの時まも彼旅客の縁類の尻をりて頭を垂れを又たれ彼の  
 回答どうらゆたかりを浅良井がなぐり答へ彼何れ使を誰がより泣て泣  
 るものもまほ候せむとこの判五の微笑く否使をあらま一宝珠山よりくさふ  
 入過くこれとあつて苟且まらぬく来れ且時多かかふ人の世の御寺  
 よの十町まの出入衛門新幾田溝整橋と渡り折られぬ社伎の石を袂に拾

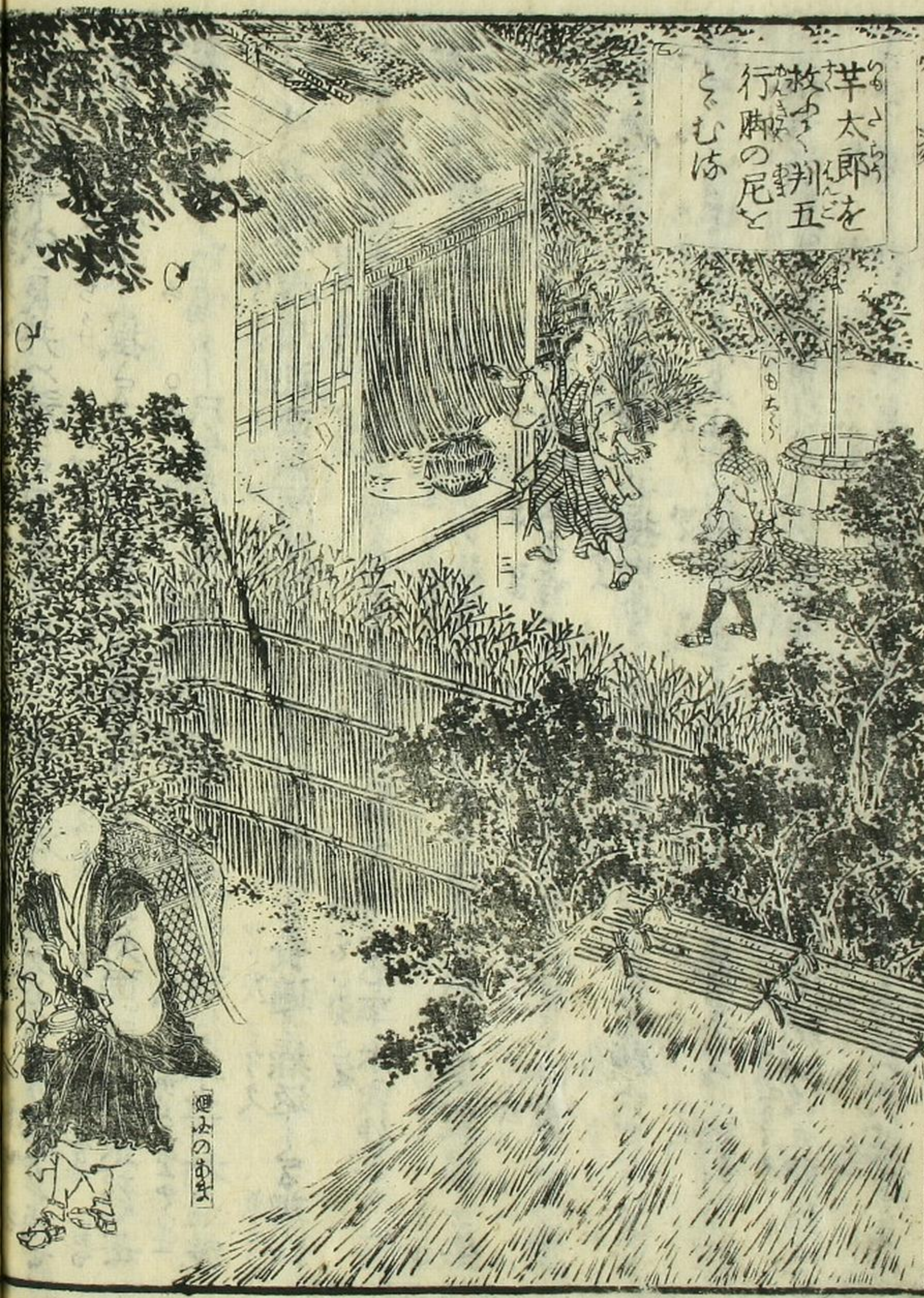
入れて身を投んとしければならぬも置れ抱れ林めとまむその情由を原祐（おがもと）小倉里（おくら）の  
 鐵後寺泊（てつごてら）のやとむる貧乏もゆめの子小太郎（おまたろう）のそのとよ地方（ちかた）とて彼  
 港（みなと）遊女（あそび）の身をのち崩（くづ）て親の勘當（かんだう）ひきよる且（かつ）みゆらちとてその岸（し）  
 於（お）辨（は）をせよる業（わざ）もるれま小親（おぢい）の友（とも）も疎（うす）れてそのの住（すま）ひもあひの任（まか）せ富國（とみくに）  
 加（か）と決（けつ）のほより外（ほか）伯父（おぢい）あやまりそく母（はは）はくまればものも父（ちち）伯父（おぢい）夫婦（めづま）のこの  
 春（はる）の時疫（としかげ）やうちつれて身（み）まるる素（す）より伯父（おぢい）の子（こ）のるれがもむ村（むら）の人の子（こ）を  
 名跡（なせき）せよとてあつる蹟（あと）の他人（たにん）よりぬらち歎（なげ）くともゆりて一日（いちにち）のりとも舎（や）敷（しき）死（し）  
 さうと知（し）るぞ辛（くるしみ）いそよまそ来る悔（くは）もさす臍（へら）を唾（つば）とも徳（とく）もさく又（また）只（ただ）越（こ）後（ご）還（かへ）ん  
 と欲（ほ）されとも路費（ろひ）の竭（つき）り死（し）まむ憂（うれ）をさる涙（なみだ）のあつと思（おも）ひ決（けつ）めよとるまの放（はな）ち  
 めと泣（な）声（こゑ）小口（こくち）説（せ）文（ぶん）る懺悔（ざんげ）の趣（おも）せと不便（ふべん）弥（や）す七（しち）教訓（きょうくん）の情（なさけ）とえれば多（おほ）の時（とき）  
 時（とき）今宵（けふ）の佛（ぶつ）東（とう）小千（せうせん）萬（まん）僧（そう）小存（せうぞん）を薦（せん）め施物（せぶつ）をさるせのその經（きやう）を積（た）むとて人の  
 一個（いっごう）の必死（ひつし）を極（ごく）むれまむる功德（くつとく）のゆりて思（おも）ひをさす説（せ）曉（きやう）とて法（ほ）の舊里（きうり）還（かへ）るもの  
 路費（ろひ）のこのかともせん宿所（しゆくじよ）をよと後方（ごほう）は跟（お）とけりまあれとも庵（あん）溜（りゅう）の混雜（こんざつ）又（また）身（み）出（で）  
 留守（りうしゆ）のの向（むか）つ言（こと）のさうさうと生（な）る小暇（せうか）ありたともさうさうと説（せ）示（し）其（その）淺良（せんら）井（い）はま  
 つくつとていふとよ憐（れん）れそとては功德（くつとく）はゆるりやまの人のよとて人（ひと）のよとて遇（あ）はれま  
 けり命（いのち）めを死（し）祥（さむらい）るも死（し）今（いま）のうたをたれまむとて舊里（きうり）立（た）つる人をよとて親達（おやたち）の勸解（くんげ）て  
 向後（むこう）を慎（しん）むと論（ろん）せの判五（はんご）小膝（せうか）を進（すす）めく喃（なん）旅（りよ）の人（ひと）芋太（いもた）と申（まを）入（い）途（と）をさるものひつる  
 ぞうらる時の恨（うらみ）の誰（たれ）もるたよるなとも色（いろ）小迷（せうま）ひ慾（よく）ひ引（ひ）きとて親子（おやこ）の愛（あい）を喪（な）ひ  
 りけいもるた不（ふ）簡（かん）親（おや）の憎（にく）むとてゆめどもよ小懲（せうちやう）艾（あ）の勘當（かんだう）より身（み）の措（お）外（ほか）のま  
 ありへの免（めん）さぬ天（あま）の咎（とが）めむとてあひ怕（おそ）れて過失（かすし）を改（あら）るままそののまよとてをさるまむ小  
 命（いのち）を捨（す）るも不（ふ）孝（かう）のうの大不（おほ）孝（かう）死（し）とて地獄（ぢごく）の呵責（かせき）を受（う）とも浮（う）む瀬絶（せせつ）とるるべ  
 志（こころ）を更（か）めく故郷（こきやう）へとて人（ひと）がまふ人（ひと）とてさうと欲（ほ）むる款（くわん）さるる路費（ろひ）を取（と）らるるべ

ちうらひなる秋の夕暮をいと河津草太の小骨をさして縁の框小額をたのむひる  
 るに慈悲洪恩何の時ふと忘れたる宜き御辭を推し進めまうは鳥の啼き  
 望むに似られたるもよや路費を賜りて今舊里に及びても親の怒を寛むは元  
 とまじきまはるる願ひの二年三月召使ひぬる木綿よりとも新に衣被く  
 還らざる為に常言の故郷錦がる大家に使れり辛防せよ家累を勸解  
 親の許しやせんこれの田を鋤た新権り夜も日もつらむのと辛に勤も厭ひはト  
 とのふを判五の使ひぬるさすふ必りるる寔は殊勝のゆるがる保人もる旅  
 客とまはるるあま使はぬとまはるる疲勞を堪へる今宵一宿留もせんそれ汝の後  
 方をとりぬる西の方なる角門を推せの庵福に入るをう一僮僕もあまうとまはる  
 餅を飯まされぬとまはるる情も辭小草太の感涙を拭ひぬるあま伏  
 拜と身を起さんとする折らう一二と小三を伴ひぬる判五をうらむ近  
 進の檀那の御寺よりをく還るを候も先の程もあるとまはるる  
 些間合きりありて隣村まで赴けりとの間小三の框よまをうけうち登  
 るや阿翁はるる母もよ只今かり侍りぬるとのひらと骨の簾戸をひら  
 常に住る小部屋のまきりゆき浅良井やとほとあまうとまはるる其れ開  
 せまらぬとまはるる足踏鳴らして禰室の幼きまの目覚めるとと驚れて立ち  
 あまう簾戸を闔てゆく年七の秋むすした遊敵の稀きと不樂しとのまはるる  
 兒も寄食人となり大人に叱咤せられたり利利りととまはるる目送る一二を判五のち  
 招きよきく戸裡殿より村巡りの風聞ありとまはるる虚実のまはるる同  
 一にそのまはるる鄰村でも虚実のまはるる死にまはるる判五の沈吟とまはるる  
 ら人の風聞のまはるる時を信じてまはるるかまはるる獨り寺ありのまはるる  
 さふ必死の人を救ふるその故に如此とまはるる入の彼れを指さし示せ一二とまはるる

後方より感嘆とそめの人を以て形を思やうと棄れり。餓も勞もあつらふ。  
 物之をせんころすと半屢に穿く先より立や。電門の戸を閉て誘ひ。草六郎の  
 棄られて迷へる狗の尾を挿さる。二三少後小跟れををりて。庵邊のくふ  
 赴たり。浩如の外面は鉦の鳴る。修行者の唱名の声あつたを判五の女は  
 法捨せんと忙しく端らう立出さる。や喃くと音を頻り。小鳴ると喚入れぬ。あは  
 過ぎ。修行者の衡門より進み入ると。これ半の五十許。歳背の細小る。細代造の  
 笈を肩て。膏少の麻の腰衣を脛高に被る。帯少の妙座の鉦を著て。右の小素怪の撞  
 木を握合。左の小菩提樹の珠数を納む。虎口の邊に懸り。白袴の單衣を穿。色を  
 腕囊脚絆も。幾月幾日の風雨を曝されん。その色とも。うぬま。と。彼田鼠の毛衣も  
 今一ト。何ぞ涅と。況て日。佳。埃。旅。瘦。の。面。影。の。身。を。野。薔。の。任。り。久。号。の  
 一箇の尼法師。奥の妙藏が。倚る。も。圓。位。の。妻。の。果。と。を。何。く。その。容。殊。勝。見え  
 けける。當下。浅。良。井。の。豫。く。用意。の。白。米。一。盆。元。祐。錢。三。文。を。り。り。添。て。出。て  
 取。り。ま。ま。足。下。の。項。に。掛。り。頭。陀。裏。の。口。を。披。け。受。納。め。て。外。面。の。二。步。退。け。母  
 屋。を。向。ひ。鉦。の。鳴。り。只。今。志。の。精。靈。菩。提。の。為。願。以。此。功。德。平。等。利。益。施  
 一切。發。菩。提。心。應。願。礼。南。無。阿。彌。陀。佛。南。無。阿。彌。陀。佛。南。無。阿。彌。陀。佛。と。幾。遍。う。繰。返。し。る。廻。向  
 と。も。鉦。の。徐。と。出。て。程。一。判。五。の。呼。び。申。す。卒。亦。少。く。も。この  
 邊。に。一。ト。び。も。え。と。あり。とも。光。の。廻。國。と。も。あ。ん。ん。ん。の。り。る。過。世。の。果。報。也。女。儀  
 少。似。け。る。く。か。つ。も。抖。擻。行。脚。を。音。と。獨。行。と。ま。の。女。人。就。く。今。宵。と。う。宿。小  
 志。を。佛。更。の。法。筵。讀。經。の。菩。提。所。め。今。朝。と。名。執。行。これ。も。願。ひ。羽。生。す。た。故。を  
 駐。め。る。危。廻。向。と。め。る。非。時。の。饑。を。進。下。ま。う。け。り。と。他。更。も。ま。く。請。れ。て。尼。の  
 一。議。小。及。び。是。推。察。せ。ら。れ。と。く。靈。場。靈。地。を。拜。ん。と。く。關。の。八。州。四。國。九。州。漏。ま。こ  
 ころ。く。巡。り。一。程。と。も。年。來。を。歷。れ。と。も。北。國。の。も。め。と。素。と。り。の。七。を。旅。ゆ。り。



草太郎を  
 救ふに  
 行脚の  
 とむは  
 五



煙山のあま



廻向をこの方の勤といはるれば朽骨古墳のあふ毎の其処の通夜まゝに言ふに況や田猪  
もわびる施主の所望のあひまゝ推辞はうはゆる程と學の意の疎れ六字の名跡  
おも念の外史所作もはるまじい判五の教びて今が背門のち遠く先を草  
鞋を解多とひら備をくたれは浅良井のあうらひをうらふ案内はけりてとるを  
と外まき南西の庭に折戸ひきき先から款待態を行脚の尾の裡を入る  
さてもよれは位ひききはるれ許さぬと庭面の書院福室をうらうら遠く背  
門のく扇引の海も程判五の夜と脱更にと納戸のくまを赴ける有斯一程小  
庵漏の稍搗果餅の白飴洗ひ汲流を寛涼に水の音小籠の音を搦  
まむ時を殺れ角靴のさげ長夏の日も下晡とけり比及外直儀清小  
騷く戸樞殿の御内人十渡蹄馬速景ゆの来ぬひんと先走亦が呼門声小箱  
向の奴婢ホハ慌忙はく或あつ小敷知らせ或い書院の塵掃拂根収並平並  
長小曾師さる間ものくを先を追と蹄馬速景朱靴の兩刀野掃拂東影本四五  
名後々々金門袂と苛ゆく名玄閑小迫く程小箱向判五の袴の紐を結びゆ  
あま出迎へく式室小額を衝は某則判五の襦き本時の御来臨といひけるは  
こるれば村塚をさるる及む失敬御免とち賄話で案内をまれば十渡蹄馬  
引は書院の上座を席小著て威儀を繕ひ和殿があら判五の里の総角半撲  
童も百田の阿爺と喚做せとも面を穢るよりさうりふ地度臨時の新出役下官  
十渡速景と以後の所要もあはれむらば収意せられると迄の口誼言をさるる  
童ボクも線と運ぶ香煎白女座著の果子の花の色香を語を履を履  
けるさる程小朝夷三郎義秀の曩小諏訪嶺の山中ゆくゆび拂を射く驚  
盆九郎を罵懲とをが依小立別れ岩神を投ぐも程小既日子を歴はれ  
この日由の比及判五の宿所小著るけり折る来客あつとけり奴婢亦類りふ

立駭く声の定々不啻もふ呼門にも應をせむ困と四下をぐる庭門のたつ葉  
 内知るところれ四五十斤の金撮棒をのど軽かき引提ぎ進入りて前面をわが一個の  
 寶書書院をり後者の縁頼も居られ湯を飲み菓子とち啖ひ傍若無人の形勢  
 多小判五の怕慎と膝行頓首をうけるその縛のる体もろのくむひりたる恩その  
 来由をええと揚楹は芳直を編束へる隘色の蔭を躲ひ且く谷子を窺ひたり  
 當下速景容を更ぬをれ判五と鳴りれば應々膝を進を估と疾視て声をゆり立  
 朝歌經任亡びよれもその殘黨離散して雷國のわのりもあつた小故の膽太も義  
 久經任は荷膽しく竊る彼地の産物を引受て賣買し經任伏誅これをもる  
 懲りむるは彼殘黨も頗高の駝忠二との小賊とて舍藏をけより訴人のり  
 露頭せこれより駝忠二判五を捕縛せしむる事と仰らる戸極殿の元下知今  
 違り路もるは彼殘賊を推牛してその身も共縛せしむる受と罵れが駝平八十  
 多と内うと左右ひと詰よせ詰鬼返答遅いと責りけるゆひけるは冤屈の  
 外ぬは判五いづく駭怕れて顔色忽地土のく小膝も声も戦しく御渡でいども  
 然るおそし罪科を犯せる覚絶てその怨あるの誣言ふそいぬといはせも果ど  
 速景ハ何々とうの笑ひこの期ふ及ひく陳まるともあつたと免さんや所詮論ハ  
 無益なり家搜しせよと下知されれば美ると應ぬを駝平ハ齊一身を起して幾間  
 とある座舖の四隅背門は庖福と罵り物踏散を狼藉は奴婢のいづく駭  
 駭ぞ隠れぬお逃まよ周章をまるとりけり且く駝平ハ芋太郎襟上  
 獲く宙小吊しく引立ちて寶子の母より打伏せし楚と押へ動多し速景ハ  
 うち對ひく十渡殿御覽せよ此奴庖福の邊よをり某木をたぐ外面逃を  
 為体他し奴婢ホは事かひりくあつたあつた矢庭小捕へ牽りて来れり  
 こい必かの殘賊を駝忠二よそいぬと報る小判五も呆れて苦し胸を推鎖め

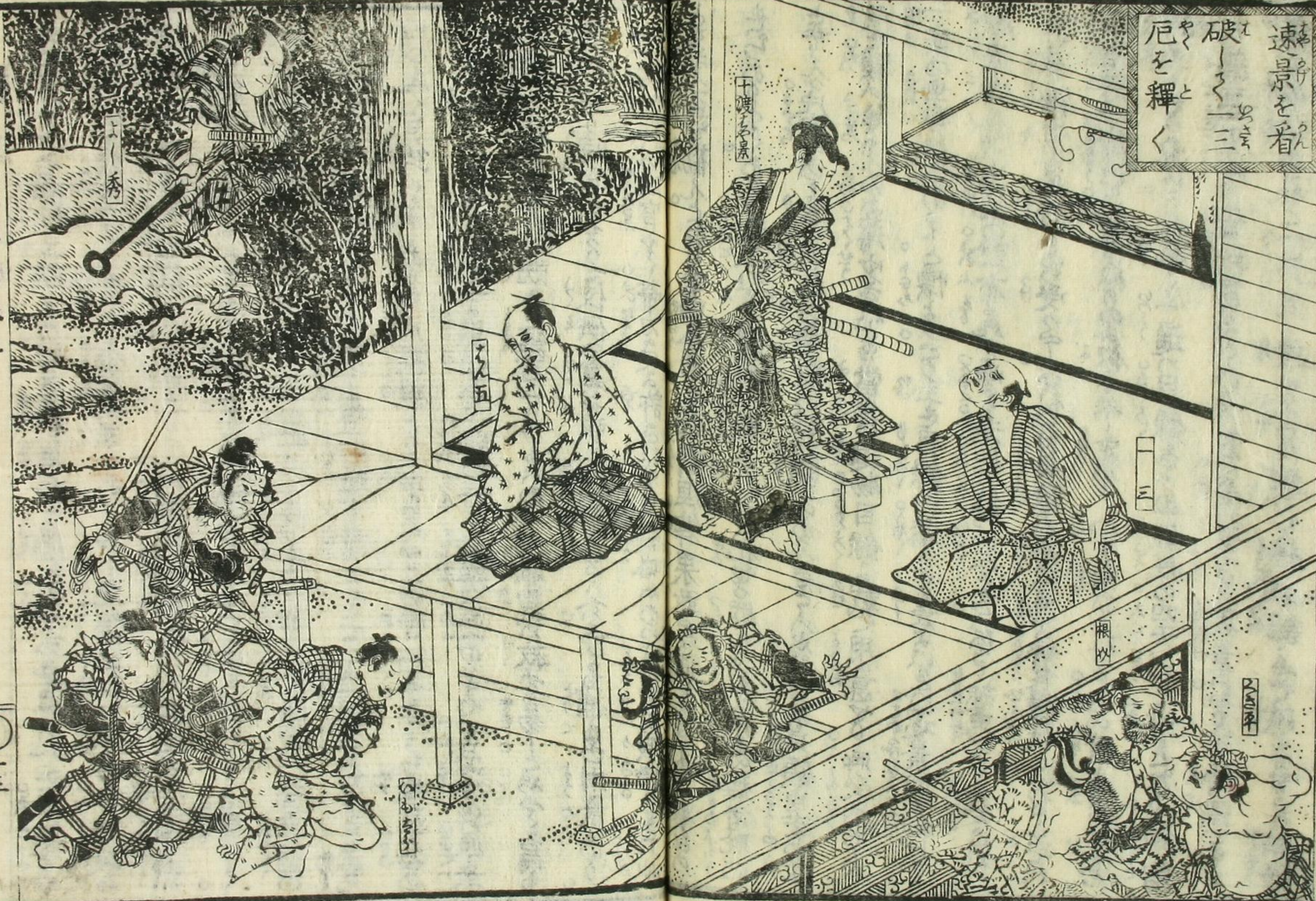
恐れ多く中上入刀袷們も嘆一召まよの男子其が身小係りるのふわど越後  
 より来つる旅客あま名ハ草太郎とつり箇様このふより溝塹橋の上入水  
 せんとした折某もどき邁あかき特小不便ありふその死を林あめ意見を加え  
 些の物を取せんそ嚮宿所へおま本一の一夜も留めりのるど誰々小の向せ  
 多相違あまうもひるむとのま草太を腕立て只今あまのいませしぞ一某のうで  
 経任が餘類きどまひ免させめと哀報を速早京うらんと冷笑ひ技巧こり  
 拵り脊を創骨を摧くまふ責懲さまのふしと情の實を吐せべきと縛  
 りく打惱さまよと烈た下知小親卒們ひらく応々用意の早繩を繰めゆき  
 草太郎を走くと縛めく背このう打懲せば草太の若痛小堪るのけんゆび声を  
 仰り立ちや上ひん且く答を放まとのま親兵のまをさめくあまやせと引起せば  
 草太の物と息をつた今ハ慥ひまよもま御推察は違ふとま草太郎と假名  
 也某実ハ脱忠二二経任滅亡しより身の措けをなす小當田國は逃れぬ細向  
 判五この年来経任一味ののるれハ由と生口多と寓く舎藏までをひひりつと  
 のま判五ハ膽を潰してゆつても仰さるは輒とせしるを突立々膝組直眼を睜り  
 の癖者奴何をういふこれハ汝が素性をまふま又彼入水の趣をゆいひもは後物  
 とせえとぞおとまの思ふ肩弁誣言ハ過世の讐言現世の敵欲あ憎腹た  
 のままはと教團でも脱忠二騷ぐ気色もま百田の阿耶よやくまよ辯度覺れ  
 術もま一勅心は諱き苛いた呵責あまより経任一味の舊縁あれハ舎藏よりと  
 まよまやといまて判五ハ怒は勝ど又ても癖者奴が偽言もま又老まん怨つま  
 のひもせまらたのまのいハと助けらる命小あまも誣言欲ゆるや二罵りまら衝  
 よまく獲著人とくけを親卒ホ透ま推隔て判五を破と打退け犯入公ま言  
 伏しつる小の罪を遣れんとて淨ひゆる大膽不敵汝をも亦縛めく打懲まま

支果ト覺期をせよと罵りて索を被んと立よりを速景と急小推禁めやこれ  
 判五と時立と傍に招き声を潜し駝忠二既首伏きこれ陳トりても罪ハ  
 追れどかれバ駝忠二のろ共よその身のさへ妻子眷属悉皆搦捕へ戸控殿  
 牽りて系うんこれの号は職役の當り然るべしとるるも相向氏に當郡  
 一の舊家ゆて鎌倉殿も知し召れせ相續の庄官多しとる只實得の利よ  
 惑て經任一味の風声ありとも渠小與く友逆の言を言るよりいゆえむさり  
 とその駝忠二を舍藏する罪輕かぬをりつら儀義小離きその彼癖者と  
 路次小縊りて和殿を陳さるよと取らるるのその妻奴子まゝ連係の坐を逃  
 れん漢土の常言ゆも千金の子ハ市に死るべしとあるを思ひむやされ古歌ゆ  
 山吹の花色ころもぬや誰とと谷ももちるふまゝ彼駝忠二の結果さ  
 向て谷もも死人ふらちる一ある方便ハ山吹の色を思ふふまゝのる一ある  
 へりやと懇態も情をさへ迷くハ然の限りの賄賂所望と解せんハ轉成に要  
 時放し可なり判五の事下事情を知れども早小忘せ頼を病て沈吟ゆ  
 中うなぐ小頭を撞きひるは親切ところより願ふともぬか死罪されども某  
 素より逆賊小交参るると絶てる一況彼平太郎を經任が殘黨する駝忠二より  
 との夢ゆもさるむむの偽りの入水と救ふる要時宿所休ませむ怒めを蒙ら  
 今更小せんする一然るを彼癖者少誣言小怕害れ竊小路次は縊らる身  
 幸ひとまると死これゆりを行ふとる再とあるる免屈も實の罪とるん  
 この義ハ許させめかと推辞を速景推くく和殿の遠慮ハ律儀過る口管  
 我意を立んとその身ハさへ妻孥を獄舎の中へ命を預る緞萬金の財祿  
 ありとも和殿小兒孫の有ふありむ事ゆまきまき方便あり武略とのも施の計  
 るるをあらむ某小任される戸控殿ハ密中黄金一箱を進りま不又おそ

あり。親卒四名と園方ふる同僚們共一ト包り贈らん然これ合せ下箱  
 るべし某の只この舊家の断絶を憐むの所得の言寡の貴意のあらん一切  
 食ふあらるべしかれ今費はさる二三千金の過ぎ枉ぐこの義小随ひ入と  
 辭せし説勸を判五の聴を頭を掉りし論と己が速景怒の  
 色見え立あぐんとさる程の隔亮の陰の竊聞のあり忽地の声をかけ  
 十渡の大人等せめ人僕主人ふまり代り御内意の後ひまらん且其祭  
 と喉と免紙門をせし頭れ出をせられ別入るべし庄司囀の二三まり  
 速景の今漸くは扱ふのあをえども怒気をもまらば忘もせむ衝と身を  
 起し舊の席に立ちりゝ毎と坐せ気色不騒ぬ二三の推携り  
 速景ふら対ひまを見参入らざりけし不審し思召れん僕に當家の  
 食客囀の一三と囀りの庫の鍵を預けれ老僕代ひはさる儲けの  
 ともおん盃を勸んとありも田舎の佃料理婢果敢てぬその問におん疑ひの  
 まらありとあるト判五の不慮の厄難を犯せし罪をぬら只の癖者耽思  
 とある片言のまら召れぬむむを護ひのあをえども只顧慮事の勘  
 向を願ひはるゝの薄ゆるれも當坐の進物目録を載て用意せり御受納の  
 一家の幸ひと入わたりと懐より出せ目録を恭しく差よはし速景回と和げ  
 原来御邊の出納の財布尻を受る老僕代の一三とさるゝ趣忠の義これ  
 と今袖の下る贈りの受とされども長途を勞ふ為め郷食膳代といつとこれ  
 ね推辞の人情をぬらぬの似るべし定めし心を用ひれる包の数も言らん  
 内見とさるわびとち披く一通の目録をぬ經任の四天王と呼きたる鐵盾  
 矢藤五重連が骨相書めくありけし是れとさる速景のものを繪圖と  
 落と周章とせと一六隠持る一口の短刀を横佩詰とせ後とさる賊將

速景を看  
破く  
厄を釋く

十渡の景



矢藤五景の経任を止む。は脱れ、絶て往方のを。骨相書を  
 りこの地を。天羅の中あり。虎狼の野心を改む。戸控殿の  
 御内人十渡蹄馬速景と偽り名告。同類を相後へ。一人越後旅客幸太郎  
 との假名さ。入水とせ入龍せ。それを嫌鳥。を欺れ。骨相書と  
 許すの金を劫奪。と巧。不敵。初より主従の物。北國の  
 人の似。且穿鑿。三千金の賄賂を貪。とせ。為体。骨相書と  
 ね。骨相書も。戸控殿より。骨相書と。被た。物の  
 蔭。合。眼上。黒子。額の外。金瘡の跡。一点違。原来  
 鐵盾矢藤五景。既。難義。救。易。捕。用意あり。  
 彼。時。宜。伎。何。裏。見。頭。捕。用意あり。  
 数代の庄官。帯刀。許。小。騙。略。苗。字。の。瑕。瑾。他  
 郷の浮浪人生。百姓。世。野。夫。功。者。迷。一。個。  
 実の名を告。推。索。被。老人。の。定。を。攬。鏡。擬。勢。判。只  
 夢の覚。驚。羞。後。方。小。措。中。力。を。擡。取。光。惚。一。二。擬。勢。を  
 資。と。詰。せ。り。騙。竊。殺。計。の。悪。棍。ホ。の。事。の。露。頭。小。の。怯。迷。足。を。踏。む  
 そ。中。小。矢。藤。五。景。顔。の。色。赭。く。り。又。蒼。く。る。ま。を。睨。詰。る。送。恨。の。暗。光。を。又。た。て  
 立。る。依。の。要。時。心。も。せ。り。け。る。これ。も。不。敵。の。癖。者。れ。此。も。懸。を。て  
 あり。左。右。を。え。く。り。適。一。三。好。眼。力。知。れ。名。生。る。及。全。景。小。經。任。を。え  
 多。り。獨。立。の。心。を。起。今。茲。三。月。の。下。濤。平。白。水。を。立。退。く。時。の。至。る。を  
 ま。の。重。連。を。汝。ホ。が。搦。捕。と。聞。く。龍。の。腮。唇。く。珠。を。蛙。の。竈。か。彷彿。り  
 又。是。の。力。で。勝。ん。と。財。庫。へ。案。内。を。あ。く。わ。ん。限。り。を。遮。与。異。議。及。ぐ  
 塵。中。の。里。の。雛。狗。を。肥。と。れ。覺。期。を。罵。り。て。刀。の。鞘。を。掛。る。一。三

矢藤五景の経任を止む。は脱れ、絶て往方のを。骨相書を  
 りこの地を。天羅の中あり。虎狼の野心を改む。戸控殿の  
 御内人十渡蹄馬速景と偽り名告。同類を相後へ。一人越後旅客幸太郎  
 との假名さ。入水とせ入龍せ。それを嫌鳥。を欺れ。骨相書と  
 許すの金を劫奪。と巧。不敵。初より主従の物。北國の  
 人の似。且穿鑿。三千金の賄賂を貪。とせ。為体。骨相書と  
 ね。骨相書も。戸控殿より。骨相書と。被た。物の  
 蔭。合。眼上。黒子。額の外。金瘡の跡。一点違。原来  
 鐵盾矢藤五景。既。難義。救。易。捕。用意あり。  
 彼。時。宜。伎。何。裏。見。頭。捕。用意あり。  
 数代の庄官。帯刀。許。小。騙。略。苗。字。の。瑕。瑾。他  
 郷の浮浪人生。百姓。世。野。夫。功。者。迷。一。個。  
 実の名を告。推。索。被。老人。の。定。を。攬。鏡。擬。勢。判。只  
 夢の覚。驚。羞。後。方。小。措。中。力。を。擡。取。光。惚。一。二。擬。勢。を  
 資。と。詰。せ。り。騙。竊。殺。計。の。悪。棍。ホ。の。事。の。露。頭。小。の。怯。迷。足。を。踏。む  
 そ。中。小。矢。藤。五。景。顔。の。色。赭。く。り。又。蒼。く。る。ま。を。睨。詰。る。送。恨。の。暗。光。を。又。た。て  
 立。る。依。の。要。時。心。も。せ。り。け。る。これ。も。不。敵。の。癖。者。れ。此。も。懸。を。て  
 あり。左。右。を。え。く。り。適。一。三。好。眼。力。知。れ。名。生。る。及。全。景。小。經。任。を。え  
 多。り。獨。立。の。心。を。起。今。茲。三。月。の。下。濤。平。白。水。を。立。退。く。時。の。至。る。を  
 ま。の。重。連。を。汝。ホ。が。搦。捕。と。聞。く。龍。の。腮。唇。く。珠。を。蛙。の。竈。か。彷彿。り  
 又。是。の。力。で。勝。ん。と。財。庫。へ。案。内。を。あ。く。わ。ん。限。り。を。遮。与。異。議。及。ぐ  
 塵。中。の。里。の。雛。狗。を。肥。と。れ。覺。期。を。罵。り。て。刀。の。鞘。を。掛。る。一。三

透さむ衝と寄せく臂を禁めく力を抜せむ入々出よと鳴るを次の間は集合  
 根々莖平真先よる他の僅僕社客何の程ふ二三暗翳を俟たる用  
 意の器械桿棒連枷引扱く隔亮の蔭より羣と走り出た撃入と競ひの  
 一と矢藤五が挑と戦力の稲妻をらぬ怯せし悪棍亦も矢藤五の気を引られ  
 衆皆力を抜つれく咄と嘯く鬼向その隙に馳忠三の尻も結びぬ詭計の縛の索  
 引解く跳菟二箇の小扇の合する桿棒奪取り夥計の悪棍のろ共々嘯叫で  
 矢藤五を援けて頻り小戦やうゆれも暇るものなり一二のわど判五を背ふ卒と  
 声を奨へ賊徒の練よ六人なる小輪あくと鳴れども武備疎疎に社客角組む  
 莖平根々亦も殺立られく幾と退く透をぬらりと矢藤五の真庫索とあち  
 こちの障子紙門を蹴るる勢ひひやく四下を拂て柱ののりたるけりこのとれ  
 ちをも義秀の離色の蔭に窺をり既小と社客亦も足るを取次を殺立る  
 ちとるるべくもをえされ義秀今ハ快く自書院の庭のあつるも玉天罰知ぬ残  
 賊共白唇小引剥して社客亦も屠らるり汝が頭の用心せし神明仏院の目よを  
 ちとも朝美三郎が嚮よりまふあをまふ其刃を退をと罵る声ハ迅雷異なる  
 ち身ハ鳥の影より速く閃りと登る縁頼より金棍棒を取延て右よ左よ撃  
 ちせつと一なる悪棍二人肩尖頭顱を碎れく苦ともいひ死んけり残る  
 三箇の悪棍ハひひける義秀が名生るも駭き本事小怕れての抑天より  
 降る軟又口地より漏る軟と罵り騒げど活路を索る暇るり一ハ已てを  
 ぬむ力を勦く殺脱んとしけるを義秀ぬらりと引つけ先進し馳忠三が  
 捍棒幾矢と打折く怯むを透さむ左よ右よ廻で礮よこり投著れば後まこく  
 進む兩人ハ象棋倒し撃倒されく三人齊一蠢然起んとするを起しも  
 ちとるるがめく礮と撃鬼神不測の力量剽技筆子の下桁うち折る



まどろ珠さうり牙る棒のまよ入らるる堪ふた累り倒ま二箇の賊の背  
骨肋骨撃断離らるる六段ふるり死でなり。

後輯第五十二  
後花の十回松  
涙種の一節籬

當下判五二三ホのハとハ多ひるはさりかる危窮の折るる義秀がかりある

瞬間小賊を二箇も漏らさず殺しその緯のる体且驚た且懼びく

餓鬼の地藏は寓ごとく海月の筋骨はあつごとく兩人ひとく声をうけて

朝夷ぬ朝夷ぬ別後の情は今る述人とるる暇る騙竊の擗長矢藤五

目今奥のくも邁り逃りやきけんおぼつるるこの義秀領くのと心も

わび血を塗れる金棍棒を引揚るひり鐵盾矢藤五を其首を長首と

奥のりる財庫を索くひりも程の忽地後方猛者ありて朝夷と名告

声器械の音烈く咬えく正しく下の甲乙が叫び倒る声とけれ駭慌て

引させつが等類の二箇も送らむを朝夷は撃れりこの朽惜といふもかく

まどろ為損と勝を取るとむるる尋思を背のり出て脱れ去るとせる

程はまるとまどろくむるむ義秀既追懸来つ重連達一何処ゆく汝中も

亦この棒を咬さぞあふと駐れやと呼りる声もかたる矢藤五の戦とせる

擬勢も庭より出んと編室の隔亮を撲地と蹴披けあふ棒児を抱さ

る姪母只ひりをり先より書院客房の戦ひあつた恐れ龍之息もせ

軍は今をひるも矢藤五が矢庭の衝入りも你母の吐嗟と駭た叫ぶを矢藤五

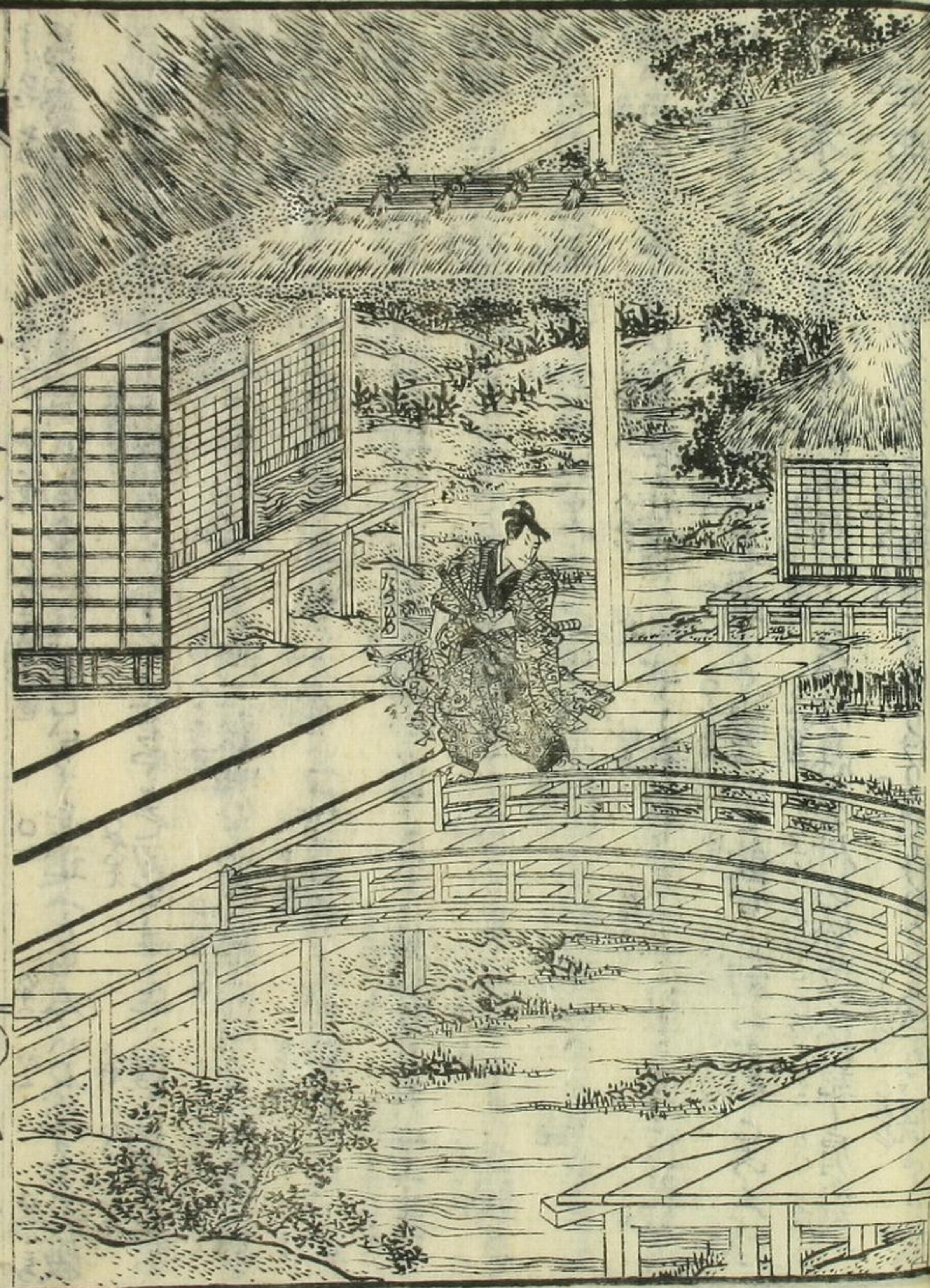
乞とあふるもま蒐て嬰児を畧んとせるを取せ下とく携るを下と蹴返せば你母ハ

膳といふ撲れ叫苦とむるの仰反り程の中せむ義秀はより近追蒐る

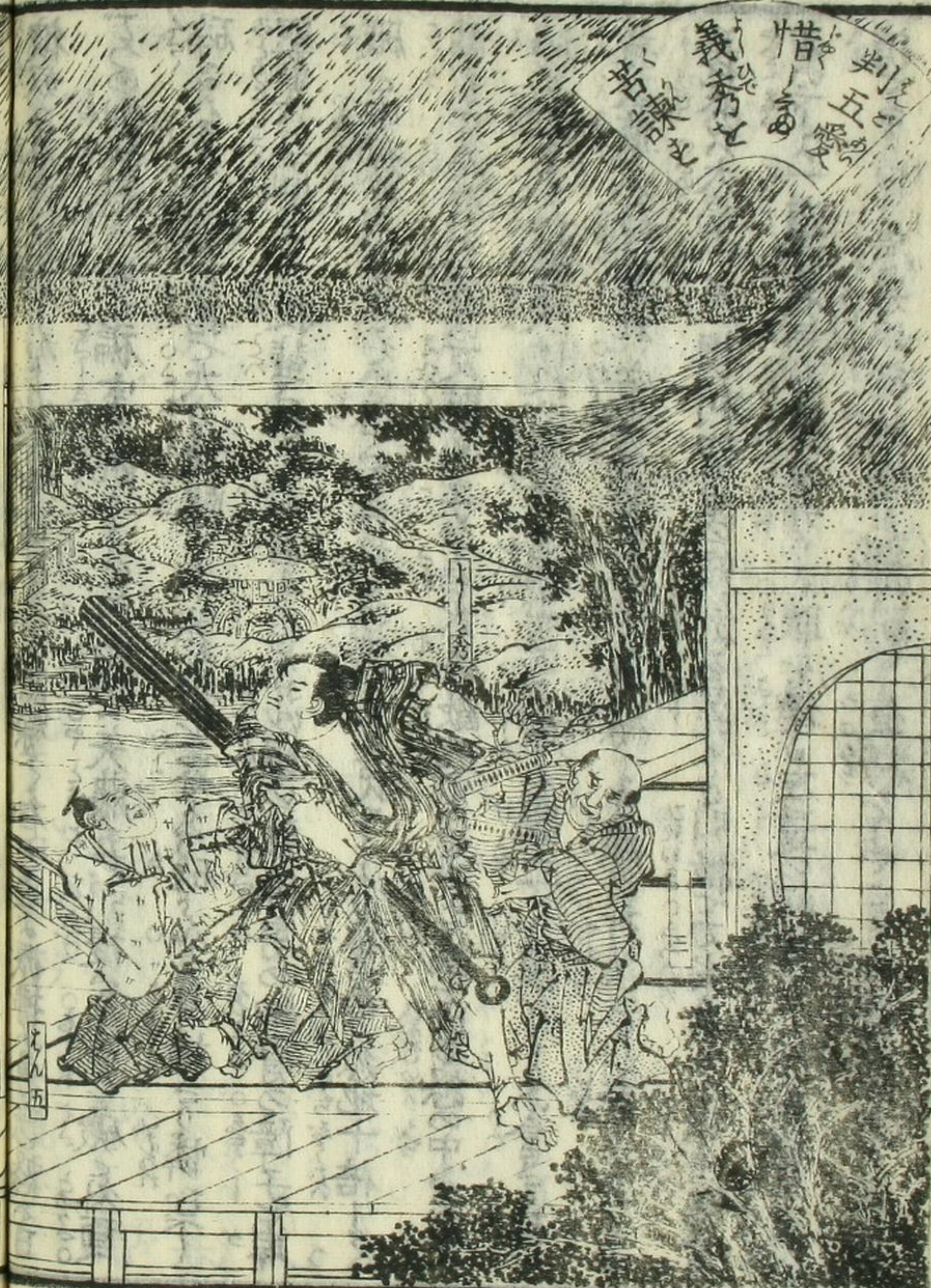
さらば既小矢藤五絶つる小泣く嬰児を擁護し質買捕る鱗張立る縁  
 頼より誇り負る声とゆり立朝夷且く其死を咄れ汝萬夫の勇ありとも近  
 この小児を屠らんとも進むや撃んとする状のふくと呼れが義秀方うらんで冷笑ひ  
 多慙る残賊奴が追詰られ苦しに随ふ數も足らぬ小児を奪きて保質小  
 ちりともこれづくおぬ汝を免さん觀念せよと罵りくとも近つるんとする程小頼のよ  
 うち泣く孫の多し身の危をも忘れる判五二三のろ共は慌惑ひくまり來りや  
 朝夷ぬ一等多の嬰児の去成の秋友鶴が産りりお身が初子きりぬを  
 暴立てり殺され後悔其怨立りて初孫を返せとるが追まき逃  
 るくと勸解の袂よりの携まづ二三も亦推禁めて阿三殿の早のめり百田の  
 ぬいごの月より憂おもひひるる白の慈も多初孫を怪我もあふ共侶小玉緒も絶  
 るひるる退はく後よと尋思もあゆめと諫るを義秀聴き顔より棹り迷  
 へるる公頼達義秀ありと木石をうねづる子を憎しとゆふゆふと車連の賊の  
 殘黨大辟不赦の罪人さればを官府よりらも徇知され搦捕れと下知  
 せられふ口恩愛小羈されて阿容くことと這奴を逃さる今さ何を役義中  
 後日の咎とのひ鮮るも加之義秀も愛小溺れて逆賊をの撃まざらと世の  
 人ふうろ指をさるる墨の衣小汝をさるる人の口は立死の誰又武支勇士  
 とのんやかむりの理義の暗なるる思ひ禁るの飲と敦團とも  
 判五のめく携りて放さるる只お身のものをさるるもるてんあ老て便り  
 まくるる只あの初孫ひとりをも受の殊殺弱の花とあて憂を慰めさるる  
 怨の擡とせられて死をまらるるの大厄難を救せ外おれやと死心されば  
 二三も亦言葉と盡して頼の小棟めく己ごのを矢藤五選よりら定て虎の卦の  
 如く天さるる口を閑たぐら笑ひ朝夷でも紙離でも立まきみよるるまふ

この股を八  
大徳を統  
九を統  
十を統  
十一を統  
十二を統  
十三を統  
十四を統  
十五を統  
十六を統  
十七を統  
十八を統  
十九を統  
二十を統  
二十一を統  
二十二を統  
二十三を統  
二十四を統  
二十五を統  
二十六を統  
二十七を統  
二十八を統  
二十九を統  
三十を統

その言の諄言のゆゑに有敷の判五善了簡さるる孫の欲する箱の  
金をとちり出せ三千両を賣せ入り氣まきり目前で巻の引道この世の  
暇取さふ後活さふ後生死さるる金の商量其の道も返合せたやと弱目よ  
債不敵の廣言声泣涸と嬰児を今を打んと取る得せし吐嗟と騒ぐ一三より  
判五の堪む声も絞るくや等矢藤五望の任せ喃朝夷ぬ千々の黄金も  
人一箇の命もあつたやとたれぬやと孫より子理を非を枉く矢藤五望金を取  
るく無異をさるるやと二三殿渠う好まの事り又過りの奥庫るる金もたれぬやと  
わくぬひひとのよ二三のちひと立んとるを義秀のいふる声もあつたや又  
阿爺も狼狽する快人の命の天の配劑長たの短たの生れても僅小五年暮  
月も至るむと強盗のよも死さるも病煩く母親の懐小命終るも皆こと脱  
れぬ命運を悟らぬ絶もせん三千両の黄金より四五十分るる金根棒を  
彼奴が為め相心かめ其処退たぬと焦燥く右と左の振拂の勇士の怒小日  
どの剽輕賊の如く福室は跳入るる程の矢藤五引提る小児を殿と外面  
碎さるり小擲ら捨て大刀抜翳しく義秀を寄る破んと身構り憐むべ  
嬰児は三間をり投蜚れく前面よりあつた園の乾淨房の細骨の障子を岸  
破と突抜てのさるるを落しければ義秀これを見てより奮勇忽地十倍しく  
國家の為め五逆の反賊も子の為め仇敵逃しせと齒と切る怒の中も足  
場を討りく裡面陔ければ廣庭に追出さんと席を蹴立く近つくまふ合する棒を  
推取直して投著れば寃違はと矢藤五緑より破と打落されて起んとるを  
義秀の大喝一声俱利伽羅の短剣を晃りと引抜て刀尖さかり小破んとする  
刃の下は一道の黒氣忽地立升りく眼を遮る左道の幼樹怪む矢藤五形は  
消てるのけり原來妖術油断と捕脱せ欬朽をやと疾視詰ても甲斐をた



判五  
惜  
愛  
七  
和  
無  
九



義秀當下と云う重連の幼術あり一旦脱亡しを追ふとも今ハ及ぶべしと投殺  
 されんが子も惜し亡骸ありともよくえたるを刃をもちて韃靼の庭に  
 先とる程は二三頻りふらち騒ぎて阿三殿喃のせえ稲向ぬら瘡満て氣を  
 失く倒れ入り人も疾をまよふと叫ぶ義秀これ敬馬たてて依  
 走りぬりぬを判五を起さしてついで脈のありまをり恥をれ根々草平  
 奴婢四五名逃駈れるのすても是首彼首より出く来る禁よ水よと立駈ぞ  
 衆皆あつを呼活すよとたすもそのほり倒臥る彼休母が為るまも  
 喚声の耳あ入りけん忽地吐嗟と叫び息をとり二三これをさすて乳母ハ  
 いま飛ざりけりそ依部屋扛と遣り湯液を飲せよ勅らむとあろの  
 さる老人の指揮は後奴婢両二人る片息する件の姪母を抱起し肩小被て  
 衆婢部屋と扛りてあたる混雜限りまりけりさすければ義秀ハ憤るる氣  
 色を二三まうち對ひくあつの公明ハ脈もた絶ゆるふ似れども必死すま症ハ  
 わど量某肥の函より浮槎道人を受ゆる起死定心の丹某ありとくく  
 用ひあつとのひハ軀ハ腰著る某は龍をもち披たてて一粒を與ふ二三を復  
 根々ホ判五を抱起すと件の禁よ水より共は沃た入れ諸声亦復活  
 るとまる程は判五を起し復て頭を擡て息を吻り潜然とて義秀をん  
 くれげや懐く泣涙ありのさのひるを二三がよろひで薦る素湯を受ゆ  
 一口飲く息を吻り喃朝夷ぬ一恩愛痴情のさるも孫が枉死は例月を渡  
 ち氣を喪ひぬ女々たるのぞと挾せられぬるふふ恥し死るる二三一朝の  
 歎たよわど去歳の弥生の起行を二月の別れとせひぬめを約束の日数懸れ  
 ども音耗る彼友達のこより大なる罪人とのひ立られぬらまを素  
 られぬぬる折小松の厚とりと二三のふあひるが友達に義を立るとせぬハ



閑ぬやう世の春さうりつ宿の秋の寤寐の心地と夜の目ものど老夫婦が  
 看病勤りの心づきしつて憂苦勞のでも察しあうかて春過は夏ハ  
 来る死天の田長を鳴る鳥の声すもも氣小なる比も四月十八日鮮明の月  
 も西ふ没るの曉の友鶴へと後のひさそ俯向膝は涙の雨と降をぐを拭拭ひ  
 鼻うらかまの曉の友鶴の睡ふごとく息絶りその先の宵を身の内田鶴媛  
 久後までそれとわたりつて年波も稍よせぬか二とらふくむくの  
 孝のめり盡さむ去歳より殊小人あぬ物をせむりくそを慰るすも  
 後の歎死を置土産に逝てふぬ別路とさうるんこの悲しよとのれい言  
 葉へ耳ふ送り目小るはえの面影のち子と参るまわねども田舎は掃る美  
 目風俗もた抱き織績ぐ女子のこ木杓余新羅の琴も今様のうひ抱え  
 勝れても可惜齡の長くと七年老る親のける子を送りて死天の旅  
 枕廻向の逆縁の土と柩より携りて老妻が歎れも夢の夢友鶴が初七日の  
 墓を参りの久さよりつが妻の卒中ゆく倒れ終は抱もぬのま病を絶は七日小  
 老針灸茶餌の驗もさく五月二日よ身すりくつこの月への憂苦苦心勞蘊  
 積て氣を塞だ心神裏に衰果て救ひぬるに老る婦人のヌヌり  
 醫師のあざゆりける某既六十六近き暮るんとは齡めて四月五月とち  
 續く只十四日の程ゆく女児を喪ひ妻小後れて残る孫の田鶴媛の心地煩  
 ちくひ日も渠をいれ病瘥り抱りたる夕も渠を抱け愁と忘れてこのあけ  
 と慰めを又只お身の内と強次血のまゆ擒れをるの救を擲殺さくも天  
 命よりとく哀まむの猛りといふも非情に似たり殊更けの友鶴が四十九日の  
 餅配り又亡妻の五七の追薦地藏尊寺へ布施齋しく法筵讀經の

朝廻向久き人の命を助け陰徳を人にとりて鄙語より鶉の喙みる  
 粗語や禍と有り一危窮を救れども孫を殺して何あせんや友鶴の  
 かんが妻され側室され初を推せば因縁義ありかんが俗母の子ありむや襦  
 袢の中より養ひ取る吾侪の義理ありむとも一トこりる妹使あむた  
 さればをあれ友鶴がかんがを恋も莫むひの實の親も孝へ負りその故る  
 かも戒名と妙孝至貞とつけられ自然は稱名詮自性かまの鳴呼  
 ぶくと釈迦は法問孔子は講書あざ笑ひたさるがらむは曾月の樹影や  
 矇やをさるるまゝ線久しう返ともあむぬの絶中人の玉緒をさむがら  
 め一形たる猛たもひふよりの心づよと憾のむぐ愚痴凝りたる老  
 人の涙の鼻をさすや一勤勞の果一まりけり理の通る哀傷悲泣と奴婢  
 木のんあむるはばりけんらの後中根たを二二の側よりあむるはばり  
 あく又義我秀より対ひ阿三との何とあむるを稻向大人の怨言の實情の  
 随ふとかんがを憎くそあむる今ゆるその甲斐なきども吾侪が小松であひ  
 とは需要時もある立よと先を妻す小袖を思ひ去歳より今茲のまむ  
 鳴の翼は一毫の音つれもく過されと友達のあむる人とも妻子あむる強  
 面くば況け亦嬰児を矢藤五奴は捉られ折渠が所望の金どて賺して  
 小児をこり復く後小娘とも遅たあむるはばり早りと子を喪れ又矢藤五  
 娘を洩せしこれお謀の勇小似たり定めて意味のあむる飲りと思ふ我  
 儂が曾あむるぬとるが田鶴とあむる孺子に闇より闇よりとも友鶴との  
 がんま心るかんがの好むの男見され女の子まれ又生もせんを女見ひとり孫  
 ひこのこれ彼共先と一稻向大人の心の哀と世は陰りるべたのあむるに  
 る人あむるるるる七七四十九日あむる魂魄天小飯るとのと友鶴との魂魄



おん身の帰郷きけい引ひかれてけを限り小屋こやの棟むねを立たもぬ去されどたりぬせし。  
 とおの思おも痴ち軟かとのひろけく背せ向むかひて目めを拭ぬぐへ判はん五ごのいと堪たんて伏ふ。  
 沈しづむ位ゐけり義秀ぎしゆの初はつより論ろん争あれ色いろさく口くちを又また頭あたまを垂たれて。  
 随まる来きるを思おもふ就つくま胸むね浮うむら養母やうぼ巴おの尾おの別わかれは小蔓こづつ。  
 往方ゆくへをわひひる言ことの母ははの甲かた斐はるまてまり果はるま今いまの歎なげれ又また後の母ははの。  
 歎なげれも身みひとらら汲みえく深ふかれ思おも愛あい情じやう義心ぎしんの悲かなしの泣なぬは泣なれは泣なれ。  
 ませども思おもひくく貌かたちを更あらめ両位りやうゐの公羽こううの怨うらみの越こみる理ことの似にこれともその。  
 人欲ひとの私しの友鶴ともづつが産うのり又また病やま著あるのともの異い義ぎ馬うま標ひら吉きち郎らう継つ忠ちゆう。  
 傳つたへたり況あはれ今いまの跡あと立たり来きつる本意ほんいさら山やま豆まめ各位ごゐと異いるらんや。  
 義秀ぎしゆも亦また眼まなこ横よこが鼻はな直ただけは七情しちじやうあり只ただ衆人しゆじんと異いるらもの信しん義ぎを重おも。  
 似にこれとも公道こうだう人情にんじやう両りやうるら全ぜんくまるらを述のむ迷まよを釋はなすは抑おさ一隔いつかく歳さい。  
 義秀ぎしゆが婚こん姻いんを推おし辞じへ友鶴ともづつの養母やうぼの子こ且かつその已前いぜん下野げやを吉見きちみ冠かん者しや。  
 井平いへいホと御ご余あの義ぎを結むすびて艱難いんなん送おく相あ相あと許ゆるせらぬのあらばは然しかるらと。  
 各位ごゐ聽きむとは栞しやう多たの妹いもうと母はは之の養母やうぼの女むすめを娶めとるらもの養子やうし合あせらるらのの一いつ所しよ。  
 不ふ住ぢゆうの義ぎをのりて妻めを娶めとるら意いさらへば枉たがへば側室そわめせらればとは友鶴ともづつをのりて。  
 妻めせらればののち小松こまつののちのあらむら二に三さん阿あ爺や遭あひまとはたらすら立たちまりしりの當あ時とき。  
 義秀ぎしゆ寛屈かんくつの罪つみあり勅しやく心しん立たちまりしりの各位ごゐを連つ係けいせらぬら且かつ早はや件けんの両友りやうゆうと索さくと會あひ。  
 とおひ故ゆゑかかて四國しこく九州きゆうしゆうをち巡めぐりしりの下したへは雁かりの翔とびをあがりしりの脚力けつりき郵書ゆうしよの。  
 便宜べんいをのもと且かつ冠かん者しや井平いへいホのまま環わりあらむとは妻子しよしの信しんせんのののとは恥ちしく。  
 多おほくの余あらまのの春幸はるしやうひの寛屈かんくつの罪つみの釋はなすは更さら東とう杖じやうをかへて稍しやう華洛からくままるら。  
 来きつ比陸ひりく奥おく信夫しんぷの戦いくさひあてて吉見きちみ冠かん者しや美邦みぱう夫婦ふうふの經任けいにんが為擣うめせられては。

平白水の楓ありと巷談既定をその某ありき今若神より更  
 陸奥の赴く轍魚の危窮を極ひて義を見てせざるは勇士ありと  
 けさの夜を日継て先陸奥を馳せり冠者夫婦を救ひ出して経任を討捕り  
 ければ功も功も誇らざり大将多田藏人が鎌倉へおとんとて只菅秀藤も袖  
 振拂く彼処を退けし地を投ぐ急ぐ程小箇様とのるふより越後の津川の旅  
 宿あり極小毒瘡の復しより病煩ふと十餘日おの外の日を過し病中やく  
 命じふふがそ彼処をもちも亦復し路も下宿りし宿りし約めは立  
 宿の檐下の松のたね待とぞ一吾妹子も姑も世もなれは名も選  
 昔語とるりる皆是天の命まをそのまをば生れてよりその容息をよも  
 足ぬる女に残賊の礫お打れ命を預せしを薄命を哀がとんや義秀が  
 不幸ぬと救ふよりもるなりとの亦のふと問れん彼矢藤五の経任の四天王  
 とゆれる驍勇の賊將へ先見遠謀のありて経任が秘藏せし幻術の書と竊りて  
 を逐電せしとふへ扇翼を添ふ術あり縦彼奴が望は任と許すの金を  
 取るとも賊情へ信義を疎し撃殺される等類の死を復さるる金を  
 奪つて小児を厚くそ術をて逃去りこれ盗糧を齎し雙刀を與ふ世の胡  
 慮とるふとんやごあわかくも田鶴媛が命運の竭る所亦のふとまをく  
 夫藤五幻術をりて輒く脱れ去りたりとも某が世に在り限り往方を常の撃殺し  
 國をのる小毒を殺さ女児が怨を報はん今各位の悔吝送恨の人情の  
 これ衆人のある義秀へ恩愛より信義を以車とてこの故に造次轉沛みる公  
 道不由のこもや忠義の狗たるも恩愛の奴もととらふより婚姻を推  
 辞しこの故も強られり今更は憂目も月然と受りてをる月非とせられ  
 る打も敵も志のひの聊も厭ひのほどと辭意くふとた諭せ判五三争やくも胃

翠の怨とけてひとく感嘆あつる中判五の慚愧も堪ざりし額を推拍し朝夷  
 ぬよ許し我儂不才の俗人るれ賢良交遊の公を考む恨まりぬれを懐こふ事  
 りをとりしるる愚痴の諄言ふりさける時を親と田鶴媛亡骸をとり歎ん  
 とのせきりし櫃を抱きて珠を送れ被あも似たりけりあの前裁る乾浄房の和若  
 ちもあられらるる如の持仏堂之本尊へ惠心作佛先祖昭穆の美位さす事妻  
 及友鶴が新位牌も建てみる彼外より朝夕の香華燈明一日の間ぬる在る  
 るの選佛場と命終り田鶴媛定業をいへぬこと二三側より百田の大人  
 寔に然る鶏卵は等し死嬰児の姿さうのふ擲れれば存命はあはれも後世を  
 憑りかんとくゆたくとんぬるやとの判五も義秀も身と起るとる後世の間  
 うち味で隔亮ををりしるるのゆりこの人誰そ其の次の巻は解分るを見し知ん

早稲田大学図書館

011888007425